

大阪の老舗と文化

—くらわんか文化の町・枚方の事例—

前川 洋一郎

はじめに 今なぜ？ 大阪の老舗と文化か！

郷土の歴史文化を勉強する時に、その地に根づく老舗をみると、歴史文化の面だけでなく政治経済や住民暮らしの面からも、新しいことが見つまり、地域社会の全体が鳥瞰できる。

これまで伝統経済学は文化の違いを無視してきた。あまりに文化の概念は多様な要素をもつため経済を説明できないと考えてきたのである。

一方、二〇世紀末からの行動経済学は、文化差の影響を考慮して心理学データなど定性情報、主観的要素も取り入れて、経済の原因と結果を分析している。

本論もこの説に立脚して、地域社会を分析しようとするものである。

全国の老舗（※創業後百年以上で現在も営業している商店・会社）について永続のサステナビリティと繁盛のダイナミズムを調査研究していくにあたり、帝国データバンクの老舗出現率（二年七月（その地域の事業所数に占める老舗の存在比率）と朝日新聞社の民力度（三年七月、そして法政大学 坂本光司教授のまとめられた幸せ度（三年十一月（府県別の生活レベルを表わす。平成三年十二月二十六日）日本経済新聞）の三つの指標（図表①））をつきあわせるとおもしろい仮説がでてくる。（老舗学レポートNo.12 老舗学研究会 平成二四年九月）

都市と老舗の関連

図表①

老舗出現率	TDB 帝国データバンク 現存企業数に対する老舗企業の割合
幸福度	法政大学 坂本光司教授 平均寿命、犯罪発生件数、未婚率、正社員比率 労働時間、離職率、出生率、医療費 生活保護世帯、など40指標 人口250万人以下の小県でものづくり産業の比率が高い所が幸せ 保育生活関連サービスの充実で高評価をとる
民力	朝日新聞 民力とは生産・消費・文化・暮らしの分野で国民が持っているエネルギー 基本人口世帯 事業所 所得 国税 地方税 産業 農業 林業 水産 工場 製品 就業者数 消費 商店販売 電灯 預貯金 住宅着工 乗用車 公共事業 文化 教育費 書籍 図書館 ブロードバンド 新聞 郵便 暮らし コンビニ 保育所 公民館 公団 病院 犯罪 など30指標

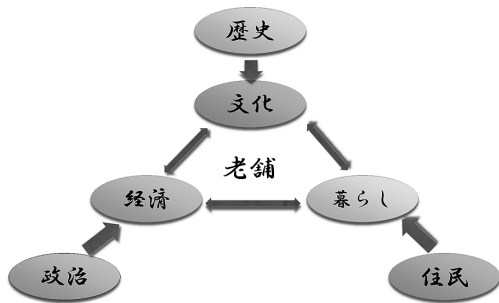
三八位、一・四七%、幸福度四七位、民力三七位計は四四位で、四七府県中、下から四位である。仮説としては、図表③の通り、歴史文化、政治経済、そして住民暮らしのトライアングルがバランスとれているところほど、老舗出現率は高い。

ということとは老舗が元気な地域は、総合的に幸せな地域といえる。即ち老舗は、地域の幸せのアンテナではないか、そして逆に地域は老舗のプラットフォームではないかと考えるのである。

図表②の通り、府県別に並べるとベスト10は福井にはじまり、島根、富山、石川…と概ね日本海側の府県が多いのである。必ずしも大都市を有する府県が上位とならないのである。ちなみに大阪は、老舗出現率は、九五・四、順位合

図表③

老舗と地域〔文化・経済・暮らし〕の関連



ここで、この仮説を検証するために、近場で土地勘のある大阪府下にフィールドをしばり、「大阪の老舗と文化」のプロジェクトをおこし、二三年六月から二五年三月までの期間で取り組んでいる。

参考迄に、直近の大阪府下の老舗の現状をおさらいすると、帝国データバンク調べ（二〇一一年十二月十六日現在）で所在と営業中の確認ができる老舗は、一二六〇社あり、出現率は一・四七%である。大阪府下の民営事業所数が約四五万社あることから逆算すると、大阪に老舗が約六六〇〇社あると推測できる。

一二六〇社の内訳は、大阪市内六一%、堺市内七%、府下三二%で、大阪市のパワーが大きい。年代別には江戸以前の創業が一〇%、明治以降が九〇%で、他府県と比べて特に関ヶ原以前、創業後四百年以上の老舗が少ない。業種別には第二次三九%、第三次六一%で、流通サービスが多い。そして、売上規模、株主構成では、ほとんどが中小企業であり、同族企業である。

ここで対象とする文化は、芸術だけでなく産業技術、社会組織、ライフスタイルなどの価値観を含めて、多様な概念でとら

そこで、この仮説を検証するために、近場で土地勘のある大阪府下にフィールドをしばり、「大阪の老舗と文化」のプロジェクトをおこし、二三年六月から二五年三月までの期間で取り組んでいる。

参考迄に、直近の大阪府下の老舗の現状をおさらいすると、帝国データバンク調べ（二〇一一年十二月十六日現在）で所在と営業中の確認ができる老舗は、一二六〇社あり、出現率は一・四七%である。大阪府下の民営事業所数が約四五万社あることから逆算すると、大阪に老舗が約六六〇〇社あると推測できる。

一二六〇社の内訳は、大阪市内六一%、堺市内七%、府下三二%で、大阪市のパワーが大きい。年代別には江戸以前の創業が一〇%、明治以降が九〇%で、他府県と比べて特に関ヶ原以前、創業後四百年以上の老舗が少ない。業種別には第二次三九%、第三次六一%で、流通サービスが多い。そして、売上規模、株主構成では、ほとんどが中小企業であり、同族企業である。

ここで対象とする文化は、芸術だけでなく産業技術、社会組織、ライフスタイルなどの価値観を含めて、多様な概念でとら

図表② 府県別老舗出現率と幸福度・民力の相関

老舗出現率				幸福度		民力			順位合計		
(22年7月)		社数	%	(23年11月)		(23年7月)					
1	京都	(1110社)	4.44	1	福井	1	福井	128.4	1	福井	9
2	島根	(327社)	4.14	2	富山	2	山梨	127.3	2	島根	14
3	山形	(530社)	3.98	3	石川	2	東京	127.3	3	富山	16
4	新潟	(1163社)	3.87	4	鳥取	4	島根	125.7	4	石川	18
5	滋賀	(427社)	3.59	5	佐賀	5	富山	122.8	5	長野	20
6	長野	(79社)	3.51	5	熊本	6	石川	120.8	6	鳥取	24
7	福井	(444社)	3.49	7	長野	7	長野	119.9	6	三重	24
8	三重	(559社)	3.22	8	島根	8	徳島	116.0	8	山形	31
9	富山	(440社)	3.21	9	三重	9	山形	115.5	9	新潟	32
10	福島	(587社)	2.99	10	新潟	10	鳥取	114.2	10	香川	39
11	石川	(403社)	2.99	11	滋賀	11	秋田	113.7	10	徳島	39
12	奈良	(317社)	2.97	12	香川	12	高知	108.9	12	佐賀	40
13	鳥取	(182社)	2.94	13	岐阜	13	香川	108.3	13	山梨	41
14	香川	(329社)	2.90	14	山梨	14	山口	106.9	14	滋賀	42
15	徳島	(223社)	2.73	14	大分	15	岡山	106.8	15	山口	55
16	佐賀	(258社)	2.69	16	山口	16	三重	105.9	16	岡山	58
17	秋田	(295社)	2.64	16	徳島	17	大分	105.4	16	岐阜	58
18	岩手	(323社)	2.62	18	広島	18	新潟	105.2	18	岩手	61
19	和歌山	(291社)	2.58	19	山形	19	佐賀	104.6	19	大分	65
20	岡山	(520社)	2.56	19	静岡	20	群馬	104.2	19	秋田	65
21	長崎	(278社)	2.36	21	愛知	21	岩手	104.1	21	栃木	70
22	静岡	(891社)	2.33	22	岩手	22	愛知	104.0	22	福島	72
23	岐阜	(466社)	2.28	22	長崎	23	岐阜	102.9	22	静岡	72
24	茨城	(567社)	2.28	24	岡山	24	愛媛	102.2	24	熊本	75
25	山梨	(270社)	2.26	25	群馬	25	和歌山	102.0	25	京都	76
26	山口	(310社)	2.26	26	栃木	26	滋賀	101.7	25	和歌山	76
27	栃木	(397社)	2.19	27	福島	27	栃木	101.1	25	愛知	76
28	兵庫	(878社)	2.09	27	愛媛	28	宮崎	100.7	28	長崎	79
29	宮城	(438社)	2.08	27	宮崎	29	広島	99.9	28	広島	79
30	愛媛	(299社)	2.07	30	茨城	30	鹿児島	99.7	30	群馬	80
31	熊本	(321社)	2.03	31	奈良	31	静岡	99.3	31	愛媛	81
32	高知	(149社)	1.90	32	和歌山	32	青森	98.8	32	東京	83
33	愛知	(1277社)	1.89	33	千葉	33	京都	97.6	33	奈良	83
34	広島	(603社)	1.86	33	神奈川	34	北海道	96.8	34	高知	90
35	大分	(252社)	1.84	35	鹿児島	35	福島	96.4	35	茨城	94
36	群馬	(427社)	1.81	36	宮城	36	長崎	95.6	36	宮崎	98
37	青森	(222社)	1.56	37	秋田	37	大阪	95.4	37	宮城	103
38	大阪	(1277社)	1.47	38	東京	38	宮城	94.5	38	鹿児島	108
39	千葉	(614社)	1.45	39	福岡	39	熊本	94.4	39	青森	109
40	福岡	(602社)	1.42	40	青森	40	奈良	94.3	40	兵庫	116
41	埼玉	(704社)	1.33	41	沖縄	41	茨城	93.8	41	千葉	118
42	東京	(2198社)	1.23	42	京都	42	福岡	88.4	42	福岡	121
43	鹿児島	(157社)	1.18	43	北海道	43	兵庫	87.2	43	北海道	121
44	宮崎	(140社)	1.14	44	埼玉	44	沖縄	85.5	44	大阪	122
45	北海道	(694社)	1.12	45	埼玉	45	埼玉	83.5	45	神奈川	126
46	神奈川	(690社)	1.11	46	高知	46	千葉	80.9	46	埼玉	130
47	沖縄	(12社)	0.10	47	大阪	47	神奈川	79.3	47	沖縄	132

(24,570社) (1.98%)

えている。従って、老舗が百年以上前の企業を対象とするから、文化も一世紀前より地域の社会と生活に根づいている伝統文化やインフラとの関連から上げてみる。即ち、食・水・芸能・工芸ものづくりなどである。

このような大阪の老舗実態の中で、第一回は北河内の枚方にスポットをあてて、探ってみる。

(1) 枚方の地勢と現状

枚方市は西に関西の母なる淀川が流れ、東に奈良と境をわける生駒山系が連なる。北にはくずは（地区物件によつて樟葉と楠葉の漢字が使い分けられている）と交野原（現在のくずはより北方面）があり、平安時代には京の公家が鷹狩りや花見に遊んだという。天の川は七夕伝説でも有名である。南は大阪に向つて河内木綿、河内蓮根で有名かつ肥沃な農村地帯に囲まれている。

ちょうど京都と大阪の中間に位置し、枚方八景を自慢するほど自然に恵まれた丘陵田園都市である。

日本最古の古事記・日本書紀に登場する難解な地名の一つである。河内国茨田郡と交野郡が中心となつてできた町である。

今や市制施行六五周年である。大阪府下では、大阪市・堺市の政令指定都市を除いた三一都市の中で人口四一万人で二位、面積六五平方キロメートルで六位の中堅衛星大都市である。

産業は、農業産出額が同様に政令指定都市を除いて府下で一〇位である。工業製品出荷額と商店年間販売額及び民営事業所数は四〜五位にランクする。民力も豊かな都市である。

(2) 枚方の歴史と文化

① 古代から中世―東西和漢の往来と文化の融合促進

枚方の町は歴史的には、五〇七年継体天皇が樟葉宮で即位されたことをはじまりとしているので、約千五百年の歴史である。

四世紀末に日本に漢字と儒教を伝えた王仁博士の墓が、JR長尾駅近くの王仁公園にある。七五〇年には、朝鮮王族の子孫・百済王が建立したとされる百済寺跡が京阪交野線宮之阪駅近くにある。

中世に平安貴族の遊獵地であつたこととあわせると、枚方は早くから大陸の外来文化と京の王朝文化が融合してできた、またその触媒の役割を果たしてきた町と想像できる。

② 戦国から近世―水陸の交錯・情報の交流とおもてなし文化

戦国時代になると浄土真宗のお寺が多くでき寺内町ができあがつた。秀吉の重臣が枚方城をつくり城下町であつたこともある。その頃より京・奈良・大阪・対岸の摂津を結ぶ交通の要衝として発展していった。

江戸時代には、幕府より岡新町、岡町、三矢町、泥町が京と大阪を

結ぶ京街道の枚方宿の指名をうけ、さらに東海道五三次が京街道を加えて五七次となるにおよんで、枚方は五六番目の宿場町となったのである。(写真①)

一七一九(享保四)年には、朝鮮国王から徳川將軍家への朝鮮通信使が枚方宿を通過している。一八二六(文政九)年には、オランダ軍医シールトが枚方宿を明光風靡な遊興地として記述している。

京の伏見と大坂天満橋の八軒家を結ぶ淀川を利用した舟運の中継港としても栄えたのである。

落語や東海道中膝栗毛には三十石船に近づき、弁当やお酒をおもしろおかしく柄悪く売りこむくらわんか舟の活躍がでてくる。(写真②)

この頃、陸運をになう枚方を通る街道は十一あったといわれる。(ひらかた第七六号 宿場町枚方を考える会 二四年十月二二日号)

一八〇〇年代前半の天保年間には、約一・五キロメートルの街道筋の旅籠と浜側の舟宿をあわせると七〇軒ほどが林立していたようである。

その中で、一五〇〇年代後半の天正年間創業の鍵屋は吉川家から高島家へと承継し、舟宿、旅館、料亭と永續繁盛してきたが、一九九七(平成九)年に閉鎖され、一八一(文化八)年建造の母屋と共に、現在は枚方市立鍵屋資料館として公開されている。京街道に面した表は、通行旅人の湯茶接待をし、浜側の裏は三十石舟のお客をひき舟にのりかえ招きいていたのである。まさに水陸両用というか水運と陸

運の接合である。(写真③)

旧街道跡を歩くと道筋の常夜灯は一八〇一(享和元)年とある。枚方市駅前の路地の角には一八二六(文政九)年の道標が建っている。

その間には虫籠窓、黒い格子戸、そして老舗名刹があり、今昔のドラマを再現してくれる。

地勢がうみだした水陸交錯による人の往来の激しさは、東西の情報交流をすすめたのである。その結果枚方は近世より、鍵屋のような水陸両用の旅館とくらわんかの言葉に象徴される、開放的で誰しもを歓迎し送りだすおもてなしの文化が芽生えたのである。

③ 近代から戦前・戦後——里山と町の共存、ものづくり文化

里山の穂谷と津田では一八世紀から続く河内そうめんが白くて質がよいと評判である。往時は五〇軒近くあり、農閑期の副業として栄えたが、手づくりのコスト高と地産地消の限界もあって、後継困難である。穂谷では本年最後の一軒が廃業となり、津田では藤井米穀店が市の研修制度をつけて独自で販売している。(写真④)

河内平野では江戸時代より木綿が有名で、近代に入り、メリヤス織維工業が発達した。そのため動力源の水車小屋にはじまり機械づくり、そして東大阪の下請産業も育っていったのである。

しかし数多くの紡績工業も大手に収れんし、化繊ファッションへの切換で消滅していったのである。今は秋に枚方市駅周辺で三百年つづくふとん太鼓巡行の祭に往時がしのばれる。

工業技術である鑄物産業は、大和朝廷のおひざもとである河内国より発達した重要な工業技術であり、全国に流れていったといわれる。その根源ともいえるのが、北河内での唯一の鑄物師であった田中家である。昭和四〇年頃、閉業し、今はJR藤阪駅近くで、枚方市立旧田中家鑄物民俗資料館となっている。

お酒はどの地方を訪ねても土着産業として永續繁盛しており、老舗の酒蔵は多い。しかし近年、酒類の多様化と愛飲人口の減少などで淘汰がすすんでいる。

枚方においても地酒の酒蔵は江戸時代には約二〇軒あったが、昭和五〇年代には五軒にまでに減り、最後の一軒となったのが、江戸末期の創業といわれる重村酒造醸所であるが、今年三月末で廃業となったのである。

これらのものづくり産業は、枚方の自然資源と地の利、水の利をいかして生まれきたものである。

明治に入り、枚方は一時、河内県に入ったり、堺県に入ったりするが、一八八一（明治一四）年 大阪府となり落ち着いた。一八九八年旧国鉄片町線（現JR学研都市線）一九一〇年 京阪電車が開通し、陸交通の主役が交替したのである。インフラの充実と大資本大企業による本格的な工場生産がすすむにつれ、枚方のものづくり伝統文化は衰退していったのである。

④ 戦後から現在

戦後は京阪の中間位置をいかした工業団地と住宅団地の建設、戸建住宅地の開墾で衛星工業都市兼ベッドタウンとなったのである。

その結果、夜間人口が増大し、市民には寝泊まり意識が充まんし、旧市民と新市民のコミュニケーションと文化融合が課題となっている。

(3) 枚方の老舗の今と昔

ここで(2)で述べた推察について、老舗の実態から検証してみよう。

冒頭「はじめに」で紹介した帝国データバンクの資料をみると、枚方市の老舗は調査当初十一社で出現率（二〇一一年十二月十六日現在）は、全国一・九八%や大阪一・四七%に比べて少ない〇・六%（一一社／一八三二社）である。

内訳をみると、業種は第二次が三〇%、第三次が七〇%で、田園街道地帯の文化をいかした老舗はみられない。創業年は全てが明治期であり、江戸以前の老舗がヒットしてこない。資本金、従業員数では全てが同族の中小企業である。

筆者の経験的推測と枚方の歴史文化をみるにつけ、上記のデータでは不十分ではないかと考えた次第である。枚方市の民営事務所数は一万三三五（二〇一一年民力）であり、〇・六%から逆算すると、六〇数社の老舗が存在してもおかしくない。やはり犬も歩けばなんとかが

で、街を歩き、図書を調べ、古老に取材すると新たに老舗がみつかったのである。

まず、明治から江戸にかけての商品広告のチラシである「引札」のコレクションにあたってみた。

枚方で天保年間から大喜という旅籠を営み、明治には大宗という質舗に転じた宮田家が収集していた引札が、現在四條畷の池田屋に保存されている（「明治のチラシ広告 大阪・枚方の引札」藤本毅 東方出版 一九九〇年）。そのうち枚方地区は一六枚六四店分がある。主な業種は菓子六、回漕五、魚五、問屋四、酒四、青物四、料理三である。その内、三〇店の所在地と子孫が確認できる。さらに現在も商売を永續されているのは、塩熊商店、八幡屋、大黒屋、佐野商店、呼人堂の五社（詳細はのちほど紹介する）である。

一六枚の引札をみると、江戸から明治にかけての枚方のにぎわいが伝わってくる。あらためて収集・保存・分析・公開に尽力された関係者に敬意を表したい。

さらに、町中を歩き、ここは老舗ではないかととびこむと、「そうです」と答える店がある。結果知り得た老舗を一覧にまとめると図表④の通りである。現在のところ、二一社とカウントできる。老舗出現率は一・一五%となる。この中でお菓子 お酒 食料品の店は 街道筋を中心に九社あり おもてなし文化の片りんをうかがわせる

一方、調査中のこの一年間に連絡がつかなかったり、閉鎖の二ユーが入ってきた店については、遺憾乍らリストから削除した。中瀬呉

服店 光産業、重村酒蔵、料亭魚慶、穂谷そつめんである。

又、食文化関連では、一九五一年発行の枚方市史に枚方名物として紹介されている新町のまくらやのまんじゅう、三矢の簾屋の手打ちうどんや山長の鮎などは、今日、みつけることができない。しかし、歴史の根源があいまいであるが、名物出口団子を売る遠州屋がある。

逆に大阪の小倉屋の別家からさらに独立して枚方にうつってきた小倉屋昆布食品くらこんや食農園の杉五兵衛をはじめ、グルメ食育の店が新興として登場している。食文化の変化を感じざるをえない。

水、旅の文化関連では、本陣跡や脇本陣跡はあるものの、鍵屋の閉鎖、旅館大川の閉店はさびしく、さらに水関連の老舗もみつけるのに骨が折れる。

しかし、京阪電車経営のひらかたパーク（ひらパー）が創業百年でローカルテーマパークとして健在であり、後継難の菊人形も百年の歴史を守るべく旧街道筋の各戸が地域の学校と連携して菊鉢植を展示して、人の眼を楽しませてくれる。

そして、枚方出身のカルチャーコンビニエンスクラブ T S U T A Y A は枚方の老舗・土木建築請負業増田組の子孫が第一創業でおこしたものである。遊の文化は残っているのである。

（主な事例）

枚方市駅をおりて旧街道に入るとすぐに眼に入るのが、北村味噌醸造場の北村本家である。一八八三（明治十六）年創業で、大阪天満橋

図表④ 枚方の老舗一覧（21社）

2012年12月21日現在

創業年		社名	事業・商品
1620～1640	寛永年間	阿み彦 ぐずは店	うなぎ割烹（昭和50年代に大阪北浜より転入）
1716～1735	享保年間	塩熊商店	創業時塩の販売 現在、建築資材、金物、荒物、陶器、建築工事
1700年頃	元禄頃	八幡屋	食料品、酒類販売
1840年代	天保年間	大黒屋	創業時旅館 19世紀末菓子屋に転業
1870	明治3	多田製茶	茶類卸小売
1883	明治16	北村味噌	味噌製造販売 1921年大阪より枚方へ転入
1889	明治22	岡部木材	建築資材
1889～1890	明治22～23	ワインハウスサノヤ	酒類販売、レストラン
1893	明治26	藤井米穀店	食品 河内そうめん
1899	明治32	アクセス	新聞小売
1800年後半	明治中頃	松本スポーツ	スポーツ用品 （江戸期 布類・明治期 米屋）
1902	明治35	初田製作所	消火器具装置製造 1967年京都より大阪を経て転入
1905	明治38	ユニオンケミカー	プリンタサプライ品、文具事務用品製造販売
1907	明治40	呼人堂	和菓子
1907	明治40	谷村工務店	建築工事業
1907	明治40	笠井商店	日用品雑貨製造卸
1912	大正元	かねまた運輸倉庫	一般貨物自動車運送
1912	大正元	ひらかたパーク （ひらパー）	テーマパーク（京阪電気鉄道）
1910年頃	明治末	大西工芸社	舞台装置・展示設備
1900年代	明治末	中藪湖山堂	印章印刷
1910年代	大正初	巴堂	和菓子製造販売、くらわんか餅

より一九二一（大正十）年に枚方へうつってきた。現在は五代目である。（写真⑤）

地元ならではの河内三昧^{さんまい}枚方の土着みそ屋として枚方の家庭の味を守っていく。菊人形みそが自信作である。同じものではなく、美味しいものをつくることにこだわっている。しかし、よいものだけをつくっていて食っていけるか、もうけるだけで良いものをつくれるか、を日々念しながら自分の店を守り、結果としてお客さんに満足していただけるウソをつかない老舗をめざしたいという。

その隣が和菓子の呼人堂である。一九〇七（明治四〇）年に初代が京都の虎屋で修業して独立したのである。今は四代目である。当初はまんじゅう屋、戦後からどらやき一本でがんばっている。味で人を呼び寄せる店をめざして、「声無くして人を呼ぶ」から店名をつけた。宮中の目録から名前をとったあかつき・暁は枚方の名菓といわれている。一子相伝で一つ一つを真心こめてつくっている。あくまでも北海道十勝

産の小豆百パーセントにこだわっている。もうける前にお客さまの心をつかむことが大切と代々言い伝えているという。(写真⑥)

続いてあらわれるのが、八幡屋である。お寺の過去帳では元禄の記録がでてくるので、およそ三百年前の創業である。いろいろな引札のコレクションで数多く登場するので、江戸から明治にかけての活躍が眼に浮かぶ。なんでも屋から雑貨屋となり、現在のコンビニ隆盛前の昭和四八年頃に、コンビニエンスストアによく似た便利屋に業態転換したのである。戦前から諸品引換券という商品ギフト券を発行している。八幡屋へいけば何でもそろふということで、枚方の住民にかわいがられたという。(写真⑦)

さらに進むと、塩熊商店、くらわんかギャラリーにでくわす。創業は江戸中期、享保年間であるので、およそ三百年の歴史である。当初は塩を扱い、塩屋とっていた。江戸後期より金物・荒物・瀬戸物を扱い、小野商店となった。(写真⑧)

最後は塩熊商店となり、建設事業そして地域の建築工事用品の中核専門商社いわばホームセンターとなり、さらに地元のために枚方信用金庫の設立に尽力したのである。近年は不動産業を中核にし、地元のために江戸期の旧邸をギャラリーとして公開している。

街道筋を西見付までいくと、ワインハウス サノヤがある。創業は明治二二〜二三年頃で、現在四代目である。当初大阪の醤油商の支店として醤油、肥料、塩などを売っていたが、独立し酒を扱い、今はワインセラー、レストランをしている。枚方の新しい食文化の流れに

のついでなのである。(写真⑨)

東手前にあるタバコのサノヤは分家であり、昔は燃料屋であったのがタバコ屋に転業している。

少し中心市街より離れた藤阪に、一八四〇年代(天保年間)創業の大黒屋がある。当初は永井一族が経営する旅館であったが、泊まり客の情報もあって、北河内でも唯一のお菓子屋をめざし転業したのである。その後、のれん分けて唯一残っていた澤井家が、永井家にかわって本家を承継している。職人の夢として有名なお菓子をつくりたい。しかし経営もある。京都と大阪の間・枚方の人を大事にする老舗でありたいという。(写真⑩)

これらの老舗の特徴をまとめると、規模は大きくない。枚方からでていかない。職人のこだわりでお店を大切に。くらわんかのおもてなし心を大事にしていることである。

枚方は素朴なおもてなし精神が「くらわんか文化」として浸透し、老舗と町が共存しているのである。

(4) 枚方のまとめーくらわんかのおもてなし文化

今一度くらわんか舟をみてみよう。江戸時代初めにはじまり、中期には伏見と大坂の間に三十石船(推定一七メートル×二・五メートル、水夫四人、客二十八人)が上り下りしていた。

そこに落語や物語で有名なくらわんか舟(推定四・五メートル×



写真⑦



写真⑧



写真⑨



写真⑩



写真①



写真②

歌い継がれる三十石船唄 平成24年11月10日
東海道宿駅会議 枚方宿大会にて



写真③



写真④

河内そうめん (提供 谷口明博氏)



写真⑤



写真⑥

一・ニメートル、二人乗り)が近寄って、鉤をひっかけて横づけし、「めしくらわんか」「酒のまんか」と独特の口上で売りつけた。はじめは高槻側からはじまったが、年々地の利から枚方側が威勢よくなっていた。戦時中の徳川陣営への協力と水運整理の役所仕事の雑務をこなしていたので、幕府から独占営業権を認められていたのである。

明治に入り、蒸気船、そして鉄道開通で消滅していった。今は「くらわんか」の言葉を冠した名産品が残っている。

「くらわんか」とは河内弁で「食べないか」「どうですか、お食べ」という意味である。枚方の豊かな食文化に恵まれたゆとりと幕府からの特権で公務もこなしている誇り、そして中継港で小舟をだしやすい地の利と、ちよつど乗客が空腹を感じる時の利をおさえて商売しやすくするために、逆に下手にでているように柄悪く、しかも自虐的にいわしめているのである。

ちよつど上方芸のあほ文化、大阪商人のいちびりに通じるものがある。心底はどこから来た客でも快く迎え、送りだしていくおうようなおもてなしの精神である。

今日では、くらわんかは、おはよう・いらっしやい・まいどおおきにと同じ扱いのあいさつ言葉と言える。これは東西の情報交流、都会と田舎の文化融合が、基盤となっている枚方のおだやかな風土と暖かい市民の心を象徴している。

現在のひらかたは交野、寝屋川との平成の合併構想を白紙にもどしたのを機に、京阪の中間地点ゆへの住民の寝とまり意識をさませ、

これまでの衛星工業都市プラスベッドタウンの二〇世紀型の都市経営から脱皮しようとしている。

七つの工業団地(都市力)、六つの大学(都市格)、そして五つの公的病院(都市活)をもつ教育文化都市と健康医療都市がビジョンである。

『上方芸能』主筆の木津川計先生が提唱「CENTRAL CLUB」(二〇〇七年九月一日、「文化力による 大阪の活性化について」P7) 13)一般財団法人中央電気倶楽部の都市の価値判断の見方である。経済の視点でパワーをみる都市力、文化の視点で品格をみる都市格、そして筆者が追加提唱する住民の視点で暮らしをみる都市活のバランスがとれた豊かで幸せな町をめざしている。心は「くらわんかのおもてなし」である。そのためにも町づくりに、里山に、老舗が活躍してほしい。全ての老舗がもっともっと主役におどりてほしいものである。

※本稿は、『大阪春秋』第150号 平成25年4月の寄稿記事、及び、企業家研究フォーラム年次大会 平成25年7月13日の発表原稿を筆者が修正加工したものである。

参考資料

帝国データバンク資料 大阪府下老舗データ、二〇二二年十二月十六日現在

- 『老舗学レポートNo.12』「大阪の老舗と文化プロジェクト、老舗学研究会
(前川洋一郎、末包厚喜)、二〇一二年
『ひらかたくらわんこ新聞 13号』枚方文化観光協会
『京街道』横井三保著、向陽書房、二〇〇二年
『大阪・枚方の引札』藤本毅著、東方出版、一九九〇年
『地域文化誌 まんだ87号』瀬川芳則著、まんだ編集部、二〇〇六年
『枚方・交野今昔写真帖』中島三佳、瀬川芳則監修、二〇〇五年
『旧枚方宿の町家と町並』枚方市教育委員会、一九八九年
『宿場町ひらかた 第76号』宿場町枚方を考える会、二〇一二年
『枚方Walker 2008 No.94』角川クロスメディア、二〇〇八年
『大阪春秋』第二巻第一号、大阪春秋社、一九九二年
ウイキペディア フリー百科事典「枚方市」、二〇一二年十月十五日
『東海道五七次イラストマップ―大坂―大津ルート』磯崎珠子著、枚方文
化観光協会、二〇〇四年
『枚方宿地区まちづくり協定』枚方宿地区まちづくり協議会、二〇一一年
DVD 『鋳物師はんべえ奮戦記』枚方文化観光協会、一九九一年
『大阪春秋』第四一巻第一号、新風書房、二〇一三年

取材協力先

- 枚方市役所地域振興部 文化観光課 主幹 野村明正
同 産業振興課 課長代理 小林弘人
枚方文化観光協会 理事長 大西信駿
同 枚方宿 鍵屋資料館 萬野芳雄
淀屋研究会 代表 毛利信二
枚方観光ボランティアガイド 松村由美子
旧田中家 鋳物民俗資料館
淀川資料館 近畿建設協会 福田広宣
穂谷そづめん 谷口明博夫妻
関西外国語大学 松岡久子

